長野市 教育センター便り

第216号　令和６年３月５日

長野市教育センター
長野市大字鶴賀550番地2
TEL 026-226-7486
FAX 026-264-7570
責任者　今井　睦俊

今年の一字

清野小学校　五年
島田　朔

ぼくの今年の一字は
「最」という字です。
来年度いっぱいで
清野小学校は閉校となります。
ぼくたちは「最」高学年となって
児童会をひっぱっていきます。
「最」後の一年を、
「最」高の一年にできるように
いろいろなことにチャレンジして
いきたいです。

「自ら学び　共に育つ」

教育長　丸山 陽一

～人生が夢をつくるんじゃない
夢が人生をつくるんだ～

「野球しようぜ！」のメッセージと共に、小学校へ野球グローブをプレゼントしてくれた大谷翔平選手が、高校生のとき「人生の目標シート」に書いた言葉です。

大谷選手といえば、野球少年がそのまま大人になったような「野球を楽しむ姿」が印象的です。ＷＢＣの決勝戦前の「憧れるのをやめましょう！今日超えるために来たので」という言葉は、チームの士気を高め、優勝へ導いたと有名になりました。

人は目標や言葉だけでは動かすことができません。大谷選手のすごいところは、短い言葉でビジョンを共有し、多くの人の「意欲」を高めているところです。

さて、学校教育では長年、「より多くの正解により速くたどり着くことができる」や「指示通りに行動できる」といった力が重視され、教えることが明確であり、子どもが受動的に授業を受ける教育が行われてきました。

しかし、現在、人口減少や少子高齢化や社会全体のデジタル化が加速する中、昨今の異常気象や自然災害の激甚化、新型コロナウイルス感染症の流行など、未曾有の出来事が次々に起こり、予測困難な激動の時代に突入してきており、新たな未来を切り拓くための資質・能力の育成が求められています。

国においても、令和５年４月に「こども基本法」を施行し、全ての子どもが安心して教育を受け、幸福な生活を送ることができる「こどもまんなか社会」の実現を目指しています。

本市ではこのような現状を踏まえ、全ての子どもたちの学習権の保障や安心できる環境づくりを進めるため、令和６年度から実施する「しなのきプランⅡ」を策定しました。

急激に変化する時代の中で、知識及び技能の定着を重視している見方・考え方から脱却し、これまで以上に学習観や子ども観の転換を図ることが求められています。

具体的には、非認知能力を意識した教育活動の工夫や授業改善を推進し、認知能力としての学力等を支えることで、伸ばしていきたい【自学自習の資質能力】がより一層伸張されると考えました。

しなのきプランⅡでは、【自学自習の資質能力】を「自ら問いをもち、自ら学びを進め、共に育っていくための資質・能力」として再定義し、非認知能力の３つの観点「未来に向かって自分を高める【みらい】」「他者を思いやりつながる【きずな】」「自分をよりよい状態にする【じりつ】」に整理しました。

また、新たなアンケート調査『しなのきFinder』を導入し、子どもの状態を把握し、【子どもを観る・子どもの声を聴く・子どもと対話する】ことを通して、一人一人に適した環境づくりを推進し、全ての子どもたちの【自学自習の資質能力】の伸張を支援してまいります。

～成功するとか失敗するとか僕には関係ない
それをやってみる事の方が大事～

大谷選手が栗山監督からメジャーリーグ挑戦の理由を問われたときに回答です。夢に向かっている姿ですね。

子どもたちが夢に向かって「自ら学び共に育つ」姿の実現を目指し、新たな挑戦をみんなで楽しみましょう！

初任者研修「冬期研修」
～１年次を振り返り、２年目へ～

近藤教育長職務代理者の講話

１年次最終回となった「冬期研修」では、まず近藤守教育長職務代理者からご講話をいただきました。４月のスタート研修、７月の夏期研修に続いて、今回は「最新の教育会の動向」についてご講話いただきました。

◇受講者の感想から
- 「学校」というものに対する認識を考え直し、変えていかなければいけないと思いました。『学校＝行くもの』ではなく、将来の自立を目指すためにどんなことができるのか。生きていくための本質の学びを支えてあげるために何ができるのか考えていきたいと思います。

次に、分散会では一年間を振り返り、自己課題に対する実践からの学びについて意見交換をしました。

◇受講者の感想から
- 分散会の中で、小学校の先生方の意見が新鮮でした。でも、校種は違えど、教師としての核になる部分は共通すると感じました。
- 先生方のお話をお聞きして感じたことは、私が悩んでいることは他の先生も悩んでいて、それについて別の視点での見方を教えてもらい、学びにつながりました。

最後に、「初任研１年次終了にあたって～教育観や子ども観の拡張を願って～」と題して、今井教育センター所長の講義を受けました。

◇受講者の感想から
- 楔(くさび)としての体験の事例は、私にとってとても印象に残る内容でした。学校に帰ってからもう一度ゆっくり読ませていただきたいです。今の子ども達の実態を考えると、そんな授業は難しいかもしれませんが、探してみたいです。
- 楔となるような体験をさせてあげられるような機会を探し続けられるように学び続ける教員であり続けたい。

本研修で、１年次校外研修16日間が修了となりました。回を重ねるごとに和やかな雰囲気になり、休憩時間も仲間と語り合う姿が見られるなど、充実した初任者研修を実施することができました。１年間、主体的な姿勢で研修に取り組み、力をつけてきた初任者の皆さんが、これからも学び続け、教師としての力をどんどん高めていくことを、心より祈念いたします。　（両角　宏和）

キャリアアップ研修Ⅰ「まとめ」
～学び続ける教師を目指して～

今井所長による講話

キャリアアップ研修Ⅰの校外研修（全７回）の「まとめ」が、１月11日に行われました。センター所長による講話、授業公開や選択研修からの学びを発表し合う演習、未来の自分像を描いて語り合う演習を通して、１年間の学びと今後の展望について考えました。

◇キャリアアップ研修Ⅰ　受講者の感想から

講話「学び続ける教師を目指して」を聞いて
- 教師に求められていることはいろいろあるが、何を目標にやっていくのか意識して学び続けていきたい。忘れられない言葉を教えていただき、福祉施設での活動で、子どもたちは本当に心を動かされる体験をしたんだなと感じた。そしてそれは教師が心を動かされてこそのことなんだと感じた。教師が感動し、子どもが感動するような種をまけるように考えていきたい。

演習「私の授業づくり」を通して
- 先生方の発表を聞いて、校種や教科など様々でしたが、子どもが自ら学習に取り組めるような工夫や、今後の生活で必要な力・考え方をどう身に付けてもらうかなど、意識する点には共通するものがあり、お話を聴きながら自分の授業を見つめ直すことができました。さらに授業力を向上させていきたいと思いました。

演習「５年後の私へ」を通して
- これまでの自分を振り返ると、色々な方の協力をいただきながら、辛いことも乗り越えてきたなと感じました。「今まで通用していたことが、今、目の前にいる子たちにはうまくいかなかった」という先生のお話をお聞きし、常にアップグレードするための努力、今の自分に足りないものをいつも考えることを忘れてはいけないと思いました。
- 大変なこともたくさんありましたが、今もこうして教員という仕事を続けているということは、何よりもこの仕事が楽しいからです。生徒を楽しませるには自分も楽しいと感じていないと、それはウソになってしまうと考えています。仕事は真面目に、けれども生徒や同僚とのコミュニケーションの中では笑顔と明るい気持ちを忘れずに、今後もこの仕事を続けていきたいです。

受講者の先生方には、キャリアアップ研修を一つの節目として、今後も「学び続ける教師」として実践を積み重ね、学校の中核となってさらにご活躍されることを祈念しております。　（小林　由起子）

キャリアアップ研修Ⅱ「まとめ」
～ミドルリーダーとしての自分の在り方を考える～

演習での発表の様子

１月18日にキャリアアップ研修Ⅱ「まとめ」が行われました。教育長職務代理者による講話、授業公開の成果と課題を発表し合う演習、「学び続ける教師」であるためにどんな自分でありたいかを語り合う演習などを通して、１年間の学びを確かなものにすることができました。

◇キャリアアップ研修Ⅱ　受講者の感想から

講話「学び続ける教師」を聞いて

- 体験の違いがけんかを生むという冒頭のお話から、小学校段階での体験の大切さを改めて教えていただきました。知識を習得していくことのみではなく、自ら学び得ていく力をもてる子どもたちとなるよう、子どもを真ん中にして学び続けていきたいと思いました。

演習「私の授業づくり」を通して

- 違う校種、教科の先生方なので、お話がとても新鮮でした。中学校で求められているものと受検で必要とされる力のギャップ、ＩＣＴを使った授業のジレンマなど、特支の世界にいると知らなかったことを知ることができて面白かったです。今までの経験に新しい視点が入ったので、ここからまた専門性を高めたいです。

演習「未来の自分へ」を通して

- 新任から変わらず、今後も変えたくないことについて、絶対にこれだということをスラスラと書くことができ、自分の中の信念はこのことだと改めて分かり、今後も大切にしていきたいと思いました。そして、未来に向けて、常にアップデートしてきたいと思いました。
- この10年間の自分の強み、弱みを考えることができました。日々の忙しさに追われる中、立ち止まるきっかけとなりました。私だけが忙しいのかと思っていましたが、他の先生も同じような生活をしており、みなさんのがんばりを感じ、私も頑張ろうと心が引き締まりました。

自己課題を据え、情熱をもって教師力を向上させていこうとする受講者の先生方の姿が大変印象的でした。今後も、学校の中核となるミドルリーダーとして、さらにご活躍されることを祈念しております。

（小林　由起子）

出前研修　それぞれの学校等のニーズに応じて実施しました

今年度は、６校と１支会、延べ126名の皆さんに受講していただきました。開催日、研修時間及び内容は、それぞれの学校の願いやご要望に寄り添って決定し、実施しました。

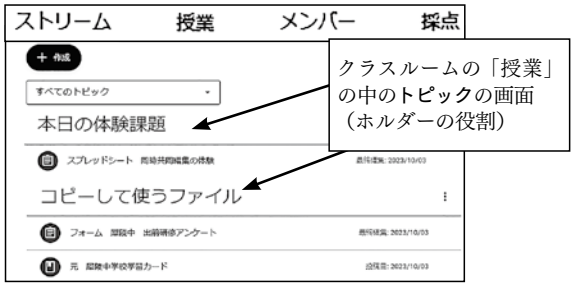
☆犀陵中学校出前研修から　（訪問日10/4）

＜グーグルクラスルームを、教科を超えた生徒の支援の場所として活用するための基礎研修＞

- 簡単に児童・生徒の思考を共有できるスプレッドシートのコピーや利用体験のあと、クラスルームの使い方や、特に「授業」の中にホルダーを作れる「トピック」の作り方を研修。後半は学校で準備したクラスルームに全員が入室し、早速各教科のトピックを作って、その中にデータを登録する応用実習を行いました。

【感想より】

- クラスルームは授業でも使っているが、トピックの機能は知らなかったので聞けてよかった。
- とても役に立ちました。また、引き続き、受講する機会があればうれしいです。
- やる気出ました。がんばります。
- スプレッドシートの元をいただけてよかった。



☆朝陽小学校出前研修から　（訪問日７/13）

＜新規採用者の願いに沿って情報係が計画し、メンターチームも参加したICT活用研修＞

- 初任者２名、メンター２名、情報係１名の計５名が参加。クラウドでの同時共同編集機能を使った協働的な学びの授業を体験し、ICTを活用した授業の見通しを持つことができました。

【感想より】

- 体験的な講座だったため、わからないことを確認しつつ理解することができました。とても有意義な時間になったと思います。
- 自分自身がもっと使い方を覚えて、児童に教えられるようにしていきたいので、今回の研修はとても勉強になりました。
- 授業に明日からでも使ってみたいと思う。
- 手軽に楽しめるものが多くあることを再確認できました。今日参加できなかった先生方にも、伝達したいと思います。

来年度も出前研修を実施します！

（中澤　康匡）

令和５年度 研修講座の成果と課題

○研修講座への参加者数

⑴　指定研修：のべ2,450名

⑵　自らの力量向上を目指す研修：のべ1,572名

○講座に対するアンケート結果

〔初任研、キャリアUPⅠ(5年研)、キャリアUPⅡ(中堅研)、キャリアUPⅢを除く2,387名〕

【アンケートの項目】
1：本研修会は、あなたにとって良いものでしたか。
2：演習・テキスト・資料等の内容は、今後の役に立つものでしたか。
3：研修講座で学んだことを自校の教育活動に生かしたいですか。

項目	A（かなりそう思う）	B（そう思う）	C（そう思わない）	D（全くそう思わない）
1	57.9%	41.3%	0.8%	0.0%
2	57.6%	41.5%	0.9%	0.0%
3	60.9%	38.5%	0.6%	0.0%

○講座目標に対するアンケート結果

目標を達成できたか	A（かなりできたと思う）	B（できたと思う）	C（できたと思わない）	D（全くできたと思わない）
全項目をまとめて	40.4%	56.9%	2.5%	0.2%

○今年度の研修講座を振り返って

上記の表に見られるように、講座に対しては99％を超える受講者の皆さんが、目標に対しては97％を超える皆さんが肯定的に評価していただきました。

今年度は、119講座（GIGA関係の６回の出前研修を含む）を実施し、受講者の延べ人数は、上記にありますように指定研修2,450名、一般研修1,572名、合計4,022名という多くの皆さんに受講いただきました。

基本方針に基づいて研修講座を構築してきたわけですが、最新の教育政策や学習指導要領等における課題に対応して講座内容を改変したり、国立教育政策研究所の調査官、大学教授、有識者等多くの講師を招聘したりし、少なからず受講者の皆さんの意識改革に寄与することができたのではないと考えています。

また、講師のリモートでの講義やオンデマンドとオンライン、対面等の複合的な形態での研修など、時期や規模、内容に応じて、より充実した研修になるように、多様な形態を工夫して取り入れるようにしてきたことも評価していただけたように思います。いずれにしましても、熱心に受講していただき、充実した講座にしていただけましたことに、心より感謝申し上げます。

○「私の研修」※1に対するアンケート結果

※１「私の研修」は、研修計画の立案や研修履歴の記録ができる記入簿です。

項　目	A（使っている）	B（不完全だが使っている）	C（使っていない）	A＋B
「私の研修」を使っているか	25.4%	43.9%	30.7%	69.3%
昨年度	17.0%	34.9%	48.1%	51.9%

教職員の研修計画や研修履歴の記録等を支援する「私の研修」の活用状況については、少しでも使っている先生が69.3％で、およそ７割の先生方が使っていただいたことがわかります。

昨年度と比較すると51.9％からの大きな増加です。新しい研修制度による研修計画や研修履歴の記録は、県の個人記録簿に記入していくようになっていますが、そのための使いやすい資料として、また補助簿としての使用などで活用状況が向上しているのではないかと思われます。

さらに使いやすく、また、主体的な研修を後押しできるような工夫を加えて改良していきたいと思いますので、さらなる活用を期待しています。

○来年度に向けて

「第３期しなのきプラン」が終了し、来年度から「しなのきプランⅡ」がスタートします。

「しなのきプランⅡ」では、急激に変化する時代の中で、知識や技能の定着を重視している見方・考え方から脱却し、予測困難な「明日」を担う子どもたちを育むために、これまでの学習観や子ども観の転換を図り、子ども自身が自分の状態を把握し、他者と関わりを持ちながら未来に向かって自分を高めていけるよう、「自学自習の資質能力」をより一層伸張していくことを目指しています。

センターとしても「しなのきプランⅡ」の方向性を大事にとらえ、４つの重点プロジェクトとの関連を明確にして、先生方が「しなのきプランⅡ」を意識しながら、自らの力量向上につながるように進めてまいりたいと思っています。そして、それが「学習観・子ども観の転換」という大きなうねりになっていくことを願っています。来年度も、教育センターの研修講座を有効にご活用ください。

（佐藤　文博）

令和５年度
理科教育センター成果と課題

本年度、下記の学習及び教職員研修・支援を行いました。

１　小学校６年生の理科学習

長野市全小学校の６年生が、一日当センターで学習します。１時限80分、午前２時限、午後１時限の計３時限授業です。事前に各学校から希望のあった実験授業２つを行いました。天文学習は必修とし、学級単位で行う利点を生かし、プラネタリウムの座席の間隔を十分に取って行いました。

また、学級担任が学習指導案をもとに補助授業者となり学習指導計画を立てることで、理科指導の力量を高めていただく機会となるようにしています。

＜学校・学級別の選択状況＞

番号	学　習　内　容	実施状況		
		学校	学　級	
			数	%
1	生き物と食べ物	18	44	38.9
2	だ液のはたらき	6	14	12.4
3	てこのはたらき	3	5	4.4
4	電気の利用	32	63	55.8
5	ものを燃やすはたらきをする気体	1	3	2.7
6	ものが燃えた後の気体	4	9	8.0
7	水よう液の性質	3	4	3.5
8	地層と岩石	41	84	74.3
	天文	54	113	100

各校がどのような視点から学習内容を選択したのか、学習後の意見や感想も含めてアンケートに記入していただいており、来年度に生かしていきたいと考えています。

《児童の感想》
- まずは電流。何よりも一人一実験ができることで、よく分かりました。オルゴールが一番使う電力が少なく、びっくりしました。＜抜粋＞
- てこのはたらきで、ぼくは力点を変えることで力の強さをコントロールできておもしろいと思いました。＜抜粋＞
- 地層では、なぜしま模様になるのかや、どろがあんなに遠くまで運搬されることは知らなかったのでとても良い勉強になりました。石は今まで色で区別していたけど、手ざわりが関係していると分かりました。〈抜粋〉
- ふだん星空を見るときに役立ちそうなこともクイズに出してもらったので、今日の夜、星空や月を見るのがとっても楽しみになりました。＜抜粋＞

２　４年生の天文学習

希望した21校の４年生の天文学習を３学期を中心に行いました（一部６年生と同日実施）。４年生では「月や星の観察」がありますが、授業中に事象に直接関わることが難しい内容です。当センターのプラネタリウムを使った学習を活用してください。

３　教育支援センターの理科学習

春と秋の２回、教育支援センターの小中学生が当センターに来て理科学習を行いました。延べ58名が参加しました。

４　教職員研修講座

教育センター研修講座「興味や疑問を生かす理科授業づくり」として５月16日中学年、５月18日高学年の２回に分けて行いました。実験装置・器具の使い方、教材の製作、観察・実験場面での支援の方法等について研修を行いました。

《参加者の感想》
- 学習を進めていくうちに生まれる「なぜ」という問いや「こうだったら」という仮説について、一緒に考えていけるように、自分の引き出しを増やしていきたいと思いました。
- 実際に一人一実験をしながらの分かりやすい講座でした。日々の授業では、たくさんの迷いがあり悩んでいます。子どもたちに理科の楽しさを伝えていきたいです。＜抜粋＞

５　理科教育に関する教職員への支援

下記⑴～⑷のような支援を行いました。理科学習支援や理科室管理等、理科教育に関することでしたらどんなことでもお手伝いします。

⑴　教材の提供〈校数〉
ホウセンカ〈45〉オシロイバナ〈21〉の種子　オオカナダモ〈6〉ホテイアオイ〈34〉メダカ〈29〉ミドリムシ〈26〉ゾウリムシ〈18〉ミドリゾウリムシ〈18〉３年種子セット〈32〉火山灰〈28〉ミョウバンの結晶〈27〉カブトムシ幼虫・成虫〈10〉

⑵　実験観察器具の貸出〈件数〉
注射器〈1〉台計り〈1〉生物標本プレパラート〈1〉骨格標本〈2〉双眼実体顕微鏡〈4〉照度計〈1〉ふるい〈1〉プログラミング用ＰＣセット〈1〉液体窒素運搬容器〈2〉超伝導実験セット〈1〉ふりこ実験器〈1〉安全めがね〈1〉簡易スタンド〈1〉タブレット用マクロレンズ〈1〉プロジェクター〈3〉

⑶　「理科教育センターだより」「天文情報」の発行

⑷　しなのき派遣〈3〉…授業支援・講習等
- カブトムシの飼育について・ミョウバンの結晶づくり・葉脈標本づくり

（池田　淑惠）

～教育研究委員会の授業公開から～

社会科研究委員会
東部中学校３年　公開授業から

社会科研究委員会では、「社会とのつながりを感じ、自ら関わっていく児童生徒の育成」をテーマに実践研究に取り組んできました。また、中学校の先生方は、１つの題材について共同で教材研究を行い、順番に授業公開しました。その後の研究会では成果と課題を語り合い、さらにアップデートさせながら次の授業実践を重ねました。

【授業者の自己課題】
自分で考え、判断し、友と協働できる授業づくり

＜３年 公民的分野「基本的人権と個人の尊重～子どもの権利～」の授業から＞

授業者は、単元の学習問題「子どもの権利を保障するにはどうしたらいいのだろう」について資料をもとに各自が調べた内容を友だちと対話する中で、共通点を見つけたり、関連づけたり取捨選択したりすることにより、子どもの権利を保障する上で必要な取り組みは何かを多面的・多角的に考察することをねらいました。

【前の２人の授業実践をもとにした手だて】
⑴　生徒が考察・構想する際の足場となる資料を用意する。また、資料の量や内容を精選する。
⑵　話し合い活動の際に見られる停滞は、熟考しているからなのか、思考停止なのかを見極め、教師が出すぎずに待つ。

ICTを活用して考えを共有し、まとめる

前時の振り返りから、生徒の言葉で本時の学習課題「調べたことを共有して、一緒に考えて学習問題の解を探ろう」を据え、班毎にそれぞれの考えに対して対話をしていきました。A生のグループでは、「いじめを早期発見できるようにアンケートを定期的に行うことや、子どもも大人も大変だから、悩み事を気軽に相談できる場を作ることが大切である」とまとめていきました。

終末、全体共有の場面では、B生は他の班の、「子どもだけ、大人だけでなく、複合的な支援が大切である」という発表についてノートに記入し、友だちの意見を取り入れながら子どもの権利について多面的・多角的に考えていました。

◇参観者の感想から
・今日の授業で、子どもたちは友だちと対話することで、現代社会の問題についての解を探ろうとしていました。大人でも難しいことです。社会科は暗記する科目というイメージが変わりました。

（両角　宏和）

体育・保健体育科研究委員会
篠ノ井西小学校６年　公開授業から

本委員会では、「運動の多様な関わり方を視点に、生涯にわたり豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」をテーマに実践研究に取り組んでいます。

【授業者の自己課題】
子どもが問いをもち、心ゆくまで探究する学びのあり方

＜６年「体つくり運動（体ほぐしの運動）」の授業から＞

授業者は、子どもがやってみたい手軽な運動をグループで考える場面を、単元の中核に据えることで、仲間や運動に主体的に関わり、すべての子どもが運動の楽しさを実感できる授業を構想しました。

【自己課題に対する手だて】
①手軽な教材、子どもが心ゆくまで探究できる活動時間の確保、メリハリ（指導と支援）ある単元展開を通じて自ら学べるよう工夫した。
②タブレット端末で運動を記録したり、評価を数値化したりすることで、考えた運動の変容を客観的に実感できるよう工夫した。

A児のグループでは、大縄跳びの楽しさを「仲間と跳び続けること」とし、みんなが楽しめるより良い跳び方を追究しました。グループ活動では、「全員が跳べること」がみんなの楽しさにつながると考えたものの、大縄跳びが苦手な仲間もいることから、A児は「どうすれば全員が跳べるのか」と悩んでいました。B児「跳びづらい原因は何かな？」→A児「縄に入るタイミングが難しい」→C児「縄の位置と縄に入るタイミングが大事かも」と、試行錯誤を始め、動画で確認しながら「縄に入りづらい人の後ろの人が背中を押してあげると入りやすい」ことに気づきました(図１)。他のグループへ自分たちの運動を発表する場面では、A児が自ら挙手をし、学級全体に自分たちが気付いたコツを紹介している姿が印象的でした(図２)。振り返りの場面でA児は、「全員が跳べると楽しい」、「みんなの声を参考に考えるとより良い方法が見つかる」と満足そうに語っていました。

図１【グループ活動の場面】
縄の位置に着目して考える児童

図２【全体共有の場面】
自分たちが考えた運動を楽しんで発表する児童

◇参観者の感想から
・子どもの声から必要な声がけを端的に行う授業者の姿勢と、「みんなが楽しめる運動」という自分事の問いから、仲間と関わり合い、夢中になって運動を探究し、体ほぐしの運動の「気付き」を実感している子どもの姿が印象的でした。

（滝澤　圭介）

外国語活動・外国語科研究委員会
篠ノ井東小学校４年　公開授業から

外国語活動・外国語科研究委員会では、「子どもが動く！心が動く！英語の授業づくり～子どもが主体となる授業の工夫～」をテーマに、実践研究に取り組んでいます。

【授業者の自己課題】
自分の思いを伝えたいと願う言語活動の設定

単元名
＜「Let’s try!2 Unit7 What do you want?」＞

【自己課題に対する手だて】
⑴　単元の導入で、単元末ゴールを共有し、活動の目的を確認する。
⑵　単元の中で同じ言語活動を繰り返す。
⑶　ICTを活用し、子どもが相手に伝えたくなるような学習意欲を高める。
⑷　子どもの実生活に即したSmall Talkに継続的に取り組む。

前時までに、自分の好みのピザの具材を友だちと伝え合う活動を行いました。本時では、児童がお客さん（身近な先生）の好きなピザの具材を動画で聞きとり、お店屋さん（友だち）と具材カードの受け渡しをしながら、お客さんに喜んでもらえるようなピザづくりをICTを活用して行いました。

Ａ生は、「先生に作ってあげたい」という相手意識をもちながら、何度もお客さんのインタビュー動画を自分のペースで聞き取り、お客さんが発した“Many many mushrooms!”という表現を自分の言葉として、お店屋さんとのやり取りの場面で自然と用いることができていました。

動画を繰り返し見合う児童

また、教師がお客さんとのインタビュー動画を児童の一人一台端末で共有できる環境を整えたことで、「具材の表現を確認したい児童」や「教師の願いをより理解したい児童」の個別最適な学びを支え、相手意識を明確にした取り組みにつながったと感じました。

◇参観者の感想から
- 授業の導入場面でのSmall Talkの積み重ねが、英語を話す雰囲気づくりにつながっていた。
- 動画やアプリを積極的に活用したことで、児童の個別最適な学びにつながり、児童が常に相手を意識して取り組めていた。
- 中間評価を行うことで、子どもの学びがより深まりやすいと感じた。

（丸山　拓磨）

令和５年度教育研究を振り返って

「第三期しなのきプラン(2021～2023年度)」と長野市の教育課題を踏まえ、共通テーマを「自学自習の資質能力の育成」として３年目となります。研究委員は共通テーマのもと自己課題を据え、自己課題解決に向けた実践を共有し合いながら、協働的な学びや個別最適な学びを視点に、ＩＣＴの活用を図りながら実践的な研究を進めてまいりました。今年度より、長野上水内教育会との共同研究となり、研究成果を共有するとともに、成果の普及と活用の強化をはかっています。

長野市教育センターの授業公開は、各学校の協力を得て小学校、中学校合わせて14の授業が公開され、のべ297名の先生方に参観いただきました。温かい雰囲気の教室において、授業者のアイデアをいかし、研究委員同士で練り上げた授業が展開されました。

先生同士が授業を見合い、議論を深めることで、自分の授業改善につなげていこうとする思いを強く感じました。このように自ら学ぶ姿勢が子ども達の学びの姿につながっていくと確信が持てる授業公開となりました。

算数の授業公開は、研修講座に位置付け連携して実施しました。また、研究委員による実践発表なども多くの研修講座で行われました。

今後、多くの先生方に見ていただけるように、これらの授業公開を含めた研究委員それぞれの研究成果を研究冊子「長野市の教育」にまとめ、新年度当初、長野市の教職員全員にお届けします。また、ポータルサイトにも掲載します。

さらに、授業公開に参加できなかった先生方のために、社会、算数、外国語の授業の様子を教員研修用ビデオ教材としてまとめ、ポータルサイトに掲載する予定です。（現在18本のビデオ教材が掲載されていますのでご覧ください。）

研究冊子及び教員研修用ビデオが、各校の校内研修で活用されることを期待しております。

◇研究委員のアンケートから
- これまでの実践の振り返りや昨年度の公開授業の反省を踏まえて、新しい試みも取り入れながら授業改善に取り組むことができた。
- 校長先生や学年の先生をはじめ、多くの先生方に指導案を見ていただくことができた。校内での広がりを感じることのできた研究だったと振り返る。

来年度は、「しなのきプランⅡ」の方向性を大事にしながら、長野上水内教育会との共同研究をより一層進めてまいります。

（宮澤剛彦）

教育相談室から ～今年度のまとめにかえて―当事者感をもつ～

本年度の就学相談の判断は、２月22日の第16回教育支援委員会をもって終了となりました。保護者の皆さま、関係の先生方、医療、福祉の方々には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

さて、本年度の相談件数は642件で、前年に比べて70件増えました。因みに、遡ってみますと、10年前の2014年の相談件数は416件でした。10年間で約1.5倍になったわけです。特に目立つのは来入児の増加で、10年前は119件でしたが今年度は204件と倍増しています。少子化の中でこうした増加はなぜかという質問はよく聞くところですが、明確には分からないというのが正直なところです。

そうは言っても、その理由を相談の主訴、つまりその子の困り感を個人因子と環境因子に大別して考えてみましょう。

まず前者については、特性という概念が広く浸透し、とりわけ発達障害についての理解が深まり、特に保護者や学校の関心が高くなってきたことがあるのではないでしょうか。それと相まって、医療からの発信や放課後デイなどの福祉サービスの利用も増え、それらが相乗的に作用しあって就学相談というかたちでひとつの解決を求めているのではないでしょうか。とりわけ来入児につきましては、保護者及び幼稚園・保育園等の関係者に、早期対応への意識が高まってきたことが推察されます。

次に後者、すなわち環境因子についてです。環境因子にはいろいろな要素があると思われますが、中でも社会的・家庭的な状況の変化、それも厳しい方向への変化があるのではないでしょうか。その子がもっているせっかくの力が、そうした要因でなかなか発揮できないという内容の相談も増加しております。

いずれにいたしましても、申し込んでいただきました相談につきましては、我々相談員は誠心誠意取り組んで参りたいと考えております。

その中で大切にしたいことの一つに、「当事者感をもつ」ということがあると思います。

以前、低体重(660ｇ)で誕生したお子さんのケースを担当したことがありました。小さく生まれたわけですので、様々な未熟な部分や疾病がうかがわれました。ＮＩＣＵ(新生児集中治療室)で長いこと看護された後、母の胸に戻ってきました。「生まれたときはペットボトル一本分でした」という母親のお話。そのお子さんが年長になり、プレイルームで目の前を笑顔で走り回っています。この生命力には唯々驚くばかりです。母親は、「とにかく入学するまでに、この子のためにできることをすべてやる」という気持ちで過ごしてきたとのことでした。

医療に全幅の信頼を置き、いくつかの手術も受け、また母親自身勉強もされたようでした。

入学先の小学校では年中のときから相談を始め、年長の春先に就学相談を申し込まれました。そして何回かの面談、検査、観察、特別支援学級や通級指導教室の見学の後、教育支援委員会での判断を受けるに至りました。

こうしたケースに接する中で思うのは、相談に来られる親御さんは、どのような思いで今日まで過ごしてこられたのだろうか、ということです。子どもが育っていく喜びと同時に、どこにもぶつけようのない気持ちを自分の中で昇華しながら、今日まで我が子を育ててこられたのではないでしょうか。そのような親御さんの人格の深さに、あらためて思いを致すのです。

就学相談に限らず広く相談の中では、まず、このような親御さんの生き方を胸に収めた当事者意識、当事者感というものをもつことが何よりも大切だと強く思うのです。

（大井　透）

編集後記

今年は元旦に能登半島で大きな地震がありました。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、犠牲になられた方々に、謹んで哀悼の意を表します。大規模災害の直後には防災意識が高まりますが、日を追うごとに、その意識も薄れがちになってしまいます。

いざという時に備え、非常時の水や食料の用意、家具の固定、避難先や安否確認方法の確認など、できることから始めたいと思います。

令和５年度の教育センター便りは本号が最終号になります。新年度は６月から４回の発行を予定しております。なお、教育センター便りは、多くの皆様にご覧いただけるよう、教育センターのホームページにも掲載しています。